学力研究の諸課題

ー研究プロジェクトの論題についてー

佐藤　学

1．問題の所在

「学力問題」についての私の認識は，「子どもたちは何故学びから逃走するか」（『世界』2000年5月号）に記しました。その要点を列挙すると，次の諸点です。

① 話題となっている大学生の「学力低下」は，第14期中央教育審議会答申（1991年）以降の高校の「選択中心の教育課程」と一連の大学入試における受験科目の削減によって，大学生の学力に偏りが生じ，教養が解体しているところにあります。

② 小学生，中学生の「学力低下」を根拠づける実証的で体系的な調査結果は存在しません。ＩＥＡテストや文部省の「教育課程実施状況調査」を見ても低下傾向は認められるものの、「学力低下」を明示的に示してはいません。

③ 小学校，中学校，高校における危機は，「学力低下」と言うよりもむしろ「学びからの逃走」にあります。「校外の学習時間」は世界でも最低レベルであり，学年段階，学校段階が上になればなるだけ減少傾向にあります。端的に言えば，小学校高学年から「勉強熱心な子ども」（2，3割）と「勉強しない子ども」（7，8割）に二分し，この二極分化は階級・階層の差異に対応しています。総じて，文化資本の二極分解が進行しています。

④ 「学びからの逃走」の要因は複合的です。社会移動の固着と階層格差の拡大再生産，グローバリゼーションによる若年労働市場の解体，学びに対するニヒリズムとシニシズムの浸透，過去30年間の学習指導要領改訂による教育内容のレベル・ダウン，教師の教養の衰退などが「学びからの逃走」の要因として考えられます。

⑤ 文部省の教育課程改革（教育内容の3割削減，選択中心の教育課程）は，諸外国の教育改革の動向に逆行する独善的な改革であり，知識が高度化し複合化する21世紀のポスト産業主義の社会に対応できない改革です。（過去8年間に高卒の労働市場の8割が消滅しており，「基礎学力」重視の教育では，社会参加の機会をますます多くの若者から奪ってしまう結果になりかねません。

⑥ 行政，組織の責任を極小化し個人の責任を極大化する新自由主義の教育改革と，科学や知識の教育を否定し「心の教育」（ナショナリズムと家父長制モラル）を主張する新保守主義のイデオロギーの浸透が「学びからの逃走」を深刻化させ，学びに対するニヒリズムとシニシズムを助長させています。

2．「学力」の概念の明確化

プロジェクト研究に先立って，「学力」に対する最小限の操作的定義を与えておく必要がありますが，私は「学力」を「achievement（測定された学習の達成度）」として限定的に定義すべきだと思います。いたずらな概念の拡張は議論に混乱をもたらすだけです。

3．「学力」問題の論題

学力研究への接近は，「実態の研究」「教育内容の研究」「学習過程の研究」「学習の文脈の研究」に分けることができます。それぞれの分野の研究課題を列挙しておきます。

第一の「実態の研究」では，①これまでの学力調査で何が測定されてきたのか。②学力調査の結果はどう解釈されてきたのか（実態を調査するとすれば，何を測定すべきか）という課題があります。

第二の「内容」の研究は，①カリキュラムの構造の分析（「積み上げ型」か「螺旋型」か，オールタナティヴの型はあるか），②教科書の内容分析，③「受験学力」の内容分析（「基本的」「網羅的」「基礎的」の三つの階層構造），④教師の content knowledge, pedagogical

content knowledge の研究，⑤教育評価の内容分析（指導要録，通知表，内申書）（「「知識・技能」と「関心・意欲・態度」の対立はどう生まれたか」などの検討が求められています。

第三の「学習過程」の研究では，①「基礎・応用・発展」という段階的学習観の検討，②習熟度別の学習過程の検討，③低学力への対応，英才教育の試みの検討などが挙げられます。

第四の「学習の文脈」の研究（学力の社会的機能の分析，文化資本の階層格差とその社会的再生産の分析）においては，「画一的内容の一元的評価（A）」から「自由な選択を基礎とする多様な内容の多元的評価（B）」への変化は何をもたらしたか，の検討が重要です。

かつての「画一的内容の一元的評価」において，学力は可視的であり，競争はトップレベルで激化し，学力の達成度の分布は菱形の構造，労働市場はピラミッド型を示していました。それに対して「自由な選択を基礎とする多様な内容の多元的評価」において，学力をめぐる競争と選別は，「自由な選択」を通して不可視に作用し，トップレベルよりも中間段階で激化しています。そして学力の分布は「菱形→ビア樽型→ピラミッド型へ」と変化し，労働市場も「菱形→楔形，つまり逆ピラミッド型」へと推移します。

その結果，今日，学力の階層格差が拡大し再生産されています。その実態と差別が再生産される過程の分析が重要な課題になっています。この格差の拡大再生産は，小学校高学年の段階から派生しますが，なぜ10歳前後で学力差が社会階層に応じて拡大するのかという問いは，古くて新しい問いです。文化資本の階層格差の再生産は，今日，学びからの逃走において顕著に機能しています。学びからの逃走という現象を地域差，階層差と重ねあわせて研究することが重要な課題になっています。

以上，学力をめぐる主要な研究課題について報告しました。このプロジェクトが，どの分野のどの課題を中心に研究を展開すべきなのか，協同研究者の一人として焦点を定めて討議していきたいと思います。

本論文は，2000年度第1回プロジェクト研究会（2000年6月3日）に話題提供され、学校臨床総合教育研究センター年報『ネットワーク第3号』（2001年3月31日発行，Pp 3−4）に掲載されたものである。